月　　刊

Mélange

島尾敏雄生誕百年記念特集

2017.11.21

特別号

「月刊めらんじゅ」特別号　目次

①　神戸から　島尾敏雄を問う

（リレートークの当日に配布つれたパンフレットより）……03

神戸と奄美から島尾敏雄を問い直す ……大橋愛由等

神戸の作家としての島尾敏雄 ……高木敏克

ヤポネシア論と「奄美」 ……前利潔

コンセプター・ 島尾敏雄……喜山荘一

②　島尾敏雄の〈行き違い〉

評論……07

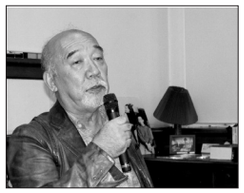
高木敏克

③　島尾敏雄と「琉球弧」

評論……13

喜山荘一

喜山荘一



高木敏克

大橋愛由等

前利潔

編集部だより★特別号／生誕百年という区切りを考えてみた。1917年生まれは先の大戦で多くの犠牲者を出した世代にあたる。この年に生まれた作家・島尾敏雄も例外ではなかった。あと一日の違いで、出撃命令がくだされ、戦死することが予想された。それは1926年生まれの父（大橋彦左衛門）も一緒だった。父も海軍の特殊潜航艇「蛟龍」に乗船するための訓練最中に終戦を迎えた。島尾も父も戦争で死ぬことの覚悟はできていただろう。しかし生き残った。復員してきた島尾と父が見た故郷の光景は彼らにどのように写ったのだろうか（島尾の神戸の実家、父の疎開先の親戚の奈良の庄屋宅は戦災にあうことなく残っていた）。それからの永い戦後。島尾も父もいまはこの世にいない。戦争で死んでしまったかもしれない二人。国家は若者に死を求める。その国家は行き続けた若者たちに、なにを託そうとしたのか。百年。永く短い百の春。（大橋記）

〈写真撮影・安西佐有理、前利潔〉

神戸から 島尾敏雄を問う

文学・思想 そして奄美の位相から

リレートーク　at 神戸文学館 2017.10.21

当日会場で配布されたパンフレットから

▼神戸と奄美から島尾敏雄を問い直す

大橋愛由等

生誕百年を迎えた作家・島尾敏雄を、神戸と奄美から問い直そうとの試みである。島尾は生涯さまざまな場所にかかわったが、どのトポスにいても〈異和のひと〉でありつづけた。強烈な出自意識をもつミホ夫人に影響されながらも、あくまでも作家としての透徹した（あるいは醒めた）視座から、かかわった場所や、夫婦関係を記述していった。いまわれわれの「島尾語り」をする人たちに求められているのは、島尾の仕事を「顕彰」することではなく「検証」することだ（言い換えれば〝偉人〟ではなく〝異人〟として捉えること）。それは島尾を神戸の作家として読み直し、神戸という地から島尾文学全体を俯瞰すること。奄美群島にかかわる人たちにとっては、島尾が記述した「奄美」ないし「琉球弧」を思想・表現の位相であらためて再設定すること、であろう。島尾は魅力的な作家である。彼が投げかけたエクリチュールはいまもわれわれを刺激してやまない。そして〈トシオとミホの物語〉は作家夫婦のリアルなありようとして普遍的な様相を呈しており。いつまでも記憶されつづけるだろう。

▼神戸の作家としての島尾敏雄

高木敏克

島尾敏雄は第二次世界大戦中の南島における特攻艇隊長としての体験を描いた「出発は遂に訪れず」や夫婦愛の修羅場を描いた「死の棘」の作家であるが、その表現の宿命的な資質の根源を書ききった基盤は神戸時代の創作活動にあった。

１９２５年から１９３６年までの多感な青年期と１９４５年から１９５２年の大学講師時代７年間をあわせた18年間を神戸で過ごしている。

その間に挟まれる戦争末期に学徒出陣の特攻隊長として奄美群島で一年過ごした体験はその後の彼の生涯を決定づけたことは確かだ。しかし作家活動の基盤を決定づけたのは神戸時代の18年間であり、その後の東京の生活は修羅場の３年間となった。

「夢の部分の研究」といわれる夢の形で内部世界を象徴主義的かつ超現実的に詩のごとく描き出す島尾敏雄独特の詩的小説の世界は18年間の神戸生活を経て３年間の東京時代に頂点を迎えることになる。その詩的小説の主な舞台となるのは奄美群島と並んで神戸の自然と街並みである。神戸の山に登っても街を歩いても島尾敏雄の痕跡が自然と共に静かにわれわれを待っている。この夏、私は島尾敏雄の聖地ともいえる奄美群島の大島と加計呂麻島島を訪ねたが、そこでは島尾敏雄は神聖に祭られていた。

このことは私にとってかなりショックなことであった。どうして神戸の人々は島尾敏雄のことを忘れているのだろう。さらにショックなことは島尾敏雄を知らない人がいることだ。奄美に行けば誰でも彼のことを知っている。それならば奄美と神戸を結ぶことによって島尾敏雄の世界を浮かび上がらせるべきだ。そこにはヤポネシアを提唱した島尾敏雄の世界観も見えてくるだろう。さらには、決して明るくはない山脈の深い闇に包まれた神戸の視点での神秘的な島尾敏雄の世界観も浮かび上がってくるだろうと思う。

▼ヤポネシア論と「奄美」

前利　潔

島尾　戦後「奄美」を論ずる場合、島尾敏雄とヤポネシア論を無視するわけにはいかない。島尾は20年間（１９５５〜７５）にわたって、「奄美」の地から小説群（『死の刺』他）と、非小説群（「ヤポネシア論」他）を発信しつづけた。ここでは、ヤポネシア論と「奄美」について考えてみたい。

「ヤポネシア」という言葉が一般化し、かなりのひろがりをもって受けとめられるようになるきっかけとなったのは、谷川健一が『日本読書新聞』に発表した「〈ヤポネシア〉とは何か」（１９７０年元旦号）である。谷川によれば、「単系列の時間につながる歴史空間」としての「日本」に対して、「多系列の時間を総合的に所有する空間概念」として存在するのが「ヤポネシア論」である。この言葉からわかるように、ヤポネシア論は時空概念である。

大陸にへばりつくように存在する日本列島の位置を、南太平洋の島々を主題として調節してみると、一つのグループとしての「日本」の姿が見えてくる。そのことが大陸からの影響ばかりを気にする、硬直した「日本」のとらえかたをほぐしてくれる。南太平洋の島々とは、ヤポネシアという言葉があらわすように、「ポリネシア、ミクロネシア、メラネシア、インドネシア」のことであると、島尾はいくつかのエッセイに書いている。

歴史教科書をひらくと、近畿や関東などのいわゆる「中央」を中心においた「単系列の時間」が記述されている。琉球弧の島々が登場したとしても、辺境の島々として記述されるにすぎない。それに対して「多系列の時間を総合的に所有する空間概念」としてのヤポネシア論は、琉球弧や東北の歴史も、日本列島の歴史として正当に位置づける。

沖縄と「奄美」では、ヤポネシア論の受容の仕方に違いがみられる。沖縄の思想家たちは、新川明の「反復帰」論に代表されるように、ヤポネシア論を日本という国家に包摂されることを拒否する思想として受容した。ところが、「奄美」側はヤポネシアと視野を広げることによってはじめて、〈奄美〉を〈日本〉という国家に正当に包摂することができる思想として受容したのである。ヤポネシア論の理解の仕方がまちがっているというのではない。ヤポネシア論がそれだけ「柔軟性と普遍性」（新川明）をもっているということであり、沖縄側は〈琉球国〉の記憶で、「奄美」側は〈日本国〉の記憶でヤポネシア論を受容したといってよい。

新川とともに島尾と交流のあった岡本恵徳は『「ヤポネシア論」の輪郭』（１９９０）において、ヤポネシア論の根底のモチーフには、「奄美」の人々が「本土」に対して持つコンプレックスを払拭したいという、島尾の願いが強く働いていたと指摘している。現在の「奄美」は、そのコンプレックスから解放されたようにもみえる。その背景には、世界自然遺産登録候補、元ちとせに代表される島唄などの「奄美」ブームがある。

「奄美」という言葉が氾濫している。沖永良部島出身の私が、ここでカッコ付きの「奄美」としたのは、「奄美」という言葉に対する違和感があるからである。島尾は「奄美の呼び方」（１９５９）というエッセイで、次のように書いている。

「奄美」という言い方は、いうまでもなく、古く律令時代に既にこのあたりの島の名として記録されていて、今は総括の名として用いられているわけだが、沖永良部島や与論島で、自分の島が奄美と呼ばれていることを知ったのは、やっと昭和にはいってからだというし、それぞれの島はそれぞれキカイであり、トクノシマであり、エラブ、またヨロンであって、観念的にはアマミの中の一つだと理解しても、島々のあいだに差異が多く、何となくぴたりとこないふうだ。

島尾のこの言葉は、現在でもそのまま通用するのではないか。

前利潔（まえとし・きよし）知名町教育委員会。奄美群島・沖永良部島在住。「〈無国籍〉地帯、奄美諸島」（『反復帰と反国家』）など奄美に関する論考多数。

▼コンセプター・島尾敏雄

喜山荘一

島尾は驚く。喜界島から与論島までの島々は、ふつう外からは「奄美」と呼ばれているのに、ひとたびその内部に入っていくと、あまねくは通用しない。なにしろ、昭和に入るまで、自分たちが「奄美」に属し、そう呼ばれていることさえ知らなかった島人もいるくらいなのだ。外からそう呼ばれているのに、島の人はそのことを知らない。また知っていても使われることがない。不思議なことだった。

それは単に島人が、無知や無関心だということではない。「奄美」を包含する「琉球」という言葉に対してがそうであるように、知っていても、そう呼ばれると拒みたい気持ちがせり上がってきて、落ち着かないのだ。島を越えた名が、根づかない。だが、島尾は、奄美から沖縄、宮古、八重山までについては、ひとくくりにして呼びたかった。なにしろそこはサンゴ礁の島々であることは共通しているのだ。

そこにひとつの輪郭が見えるのに、その名がない。あるいは定着しない。しかし名前がないということは存在しないということではないのか。島尾はそこで、「琉球弧」という言葉をつかむ。

名づけが要る、と島尾が感じたものは、もうひとつあった。日本にも、「日本」という言葉では捉えきれない余剰がある。日本と呼ぶのでは、それが見えてこない。そこで掴まれたのが「ヤポネシア」だった。

このことは島尾敏雄自身についても言えるだろう。彼は小説家には違いないが、そう呼んで済ますには収まりきれない余白を持っている。島尾は、名づけられていないものに概念を与えるコンセプターでもあったのだ。

「琉球弧」と「ヤポネシア」への反響に恐縮するように、発表後は控え目な態度を取り続けた島尾だったが、それはコンセプトを投げかけたままにしたことを意味していない。やむにやまれずというほどに、そこに内実を与えるための探究は終わることがなかった。そしてその果てに彼が表現してみせたのは、人類学者も民俗学者も描き切っていない南の島の野生の思考とも言うべき世界だったのである。

喜山荘一（きやま・そういち）
奄美群島・与論島生まれ。マーケター。企業の商品開発や販売促進を支援。著書に、『珊瑚礁の思考』『奄美自立論』『聞く技術』『10年商品をつくるＢＭＲ』他がある。

生誕百年　神戸から島尾敏雄を語る　2017.10.21　at 神戸文学館

▼神戸から島尾敏雄を問い直す

島尾敏雄の〈行き違い〉

高木敏克

島尾敏雄は私小説の作家として語られることが多く、そのために作品の内容については様々な現場調査や現認報告書のような評論が発表されている。しかし、神戸からの視点で島尾敏雄を読むと彼はやはり小説家であり決してノンフィクション作家ではない。つまり、彼は作品を事実にもとづく話として読んでほしいのではなく、虚構として読んでもらうことを意図して書いていたことが分かる。作品を作品として読んでもらうことを前提に作家は小説を書いているがその意図に反してフィクションをノンフィクションとして読もうとする傾向が出てきたのは文学の衰退そのものと思える。もし作品を総て事実として読まれるのなら誰も小説なんて書けなくなる。犯罪じゃあるまいし私生活をそこまで暴く権利なんて誰にもないと思う。

一九二五年の八歳から一九歳までの多感な少年時代と一九四五年の二八歳から三五歳までの小説家としての完成期間を彼は神戸で過ごしている。この期間に書かれたことはすべて神戸のことだというのではない。そのように思う人がいれば、その人は小説の読めない人だ。彼独特の夢のような小説世界は神戸的な世界だ。その世界は神戸的な世界というのは土着風景ではなく幻想的風景であり、あえて神戸の土着とは何かと聞かれれば、それは虚構だと言いたい。神戸とは虚構の町なのだから。そのような虚構の世界は一九五二年から一九五五年までの東京時代に持ち越されるが、その期間の作品は一旦私小説的に傾いた作風を幻想的な作風に切り替えている。その後の作品は私小説に見せかけた幻想小説として私は読むべきだと思う。そのような神戸的な仕掛けが島尾敏雄も島尾ミホも好きなのだ。

神戸から見た島尾敏雄世界はすべて虚構に見えてくる。しかし小説家はそれでよいのだ。犯罪者じゃあるまいし、調書を取る権利なんて誰にもない。ノンフィクション的な解釈は作品と作家を冒とくしているように見える。地方からの視点はすべて偏見である。神戸地方からの視点も東京地方からの視点も奄美地方からの視点もすべて偏見である。このような条件からすると、島尾敏雄は神戸人にいわせればこうだ。

島尾敏雄が最終的に奄美に移ったのは、彼が書いた小説がフィクションの作品として読まれるのではなくノンフィクションの作品として読まれはじめたからである。

大都会での生活は私生活としては大失敗かもしれないが小説家としては大成功である。その一生をかけて構築した虚構の私生活を隠し通せたことは小説家としての島尾敏雄の手柄であるが、彼には私生活の部屋の現実は狭すぎた。どんどんと私生活は浸食されて居場所はなくなってゆくからである。実に大都会は恐ろしいところである。そうなると非生活空間としての小説世界が生活空間としての家庭生活も人間関係も浸食することになる。

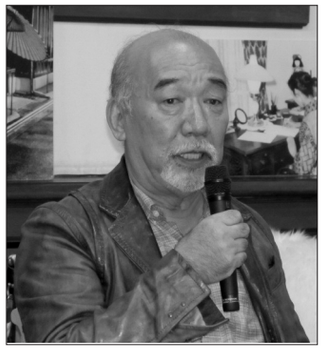
彼はついに現実を取り戻すために虚構以前の現実の世界に戻ることにした。それがかつての生死の現実の世界の南方諸島であろう。彼は狭苦しく空も海も山もない一部屋世界の大都会から出て空と海と山のそして人間の現実を奪還することにした。そうすることによって小説という商品に奪い取られた現実を取り戻せるからである。彼の作品世界は小都会の神戸で生まれたが、東京に移った私生活のような作品は修羅場と化し、東京の作品生活は三年しか持たなかった。これは島尾の戦場を南の島から東京に持ち込んだようにも見える。結果的には南の島の戦場と同様の行き違いの修羅場を東京でも経験できたからである。しかし、今度の修羅場は虚構の中に投げ込まれた現実である。作家は日記を読ませて現実を虚構に持ち込む。そして小説を読ませて虚構を現実に持ち込む。

もし、小都会の神戸で書き続けていたらその後の島尾敏雄は別の生き方をしたであろう。虚構と現実のバランスは保たれて小市民的な生活は続いたはずである。大都会では私生活を私小説に売り渡さなければ生活できなくなったみたいだ。島尾夫婦は共謀して私生活を悪魔に売り渡すことを決めたのである。それは、単純に私生活を私小説に書き写したのではない。私生活に見える虚構を構築したのである。その意味で彼は偉大な作家である。それでは、島尾敏雄の世界に入ってゆこう。これは半分が現実で半分が虚構なのか？ 一〇〇％の虚構なのか？ 疑問を持ちつつ、神戸時代にいたる幻想のきっかけのようなものを少し追ってみたいと思います。

吉本隆明はその著作「島尾敏雄」の中で島尾敏雄の書く理由について〈異和〉だという。

島尾敏雄が長崎の南山手大浦天主堂の下のCliff Houseに住んでいたころに書いた「原っぱ」という初期作品には青酸っぽい思いをかみしめるものがある。普通の少年が友達と遊んでいて、思わぬ心の行き違いに出会うことがある。これは未来の小説家でなくてもどこにでもある話である。

あこがれの少女房枝が縄跳びをしていて櫛を落とす。貫太郎は「持ってて」といわれて飛びあがるように喜んで櫛を持ち、手を洗いに帰って櫛も洗ってくると少女はすでに場所を移している。少女は櫛を洗ってもらったことなど知らずに「何してたの、貫ちゃん、嫌よ人の物を持って何処かへいっちゃ」ととがめる。遊びに慣れた少年なら「ちがうよ、房枝ちゃん。土がついてたから洗って来てたんだよ」「ありがとう、貫ちゃん」で、心の行き違いは解消されるはずである。あるいは、心の行き違いに気付かないまま通り過ぎてしまう。



神戸文学館で語る高木敏克氏

吉本隆明はこの作品について、「それにもかかわらず〈関係〉の〈異和〉はどうしようもなく少年と少女のあいだにおとずれるのだ」という。さらに、「人間と人間の〈関係〉のなかで、傷つくのはいつもより多くの心をあたえたほうだ。またよりおおく〈関係〉の意識の強度を体験したものだ。（中略）しかし、いつまでも人間と人間の〈関係〉になれることができない〈資質〉があるとすれば、その〈資質〉は、つねに、そして時を経るにつれて、ますます深く傷つかなければならない」

その〈資質〉とはどういうことなのか？あるいはどういうものであるのか？ 貫ちゃんの場合にはこの行き違いは違和感となって何時までも残る。時の流れの中での単なる行き違いが〈異和〉という固定されたものとなって残り何時までも消えない、と吉本はいう。この〈資質〉はいうまでもなく島尾敏雄の〈資質〉のことである。ここのところを〈異和〉というものとしてとらえるか〈行き違い〉ということでとらえるかは大きな分かれ道だと思える。

おそらく、吉本の評論的な視点では〈異和〉という〈もの〉として見えるものも、島尾の小説家的な視点では〈行き違い〉という〈こと〉でとらえられるのではないか。評論の世界で〈異和〉で終わってしまうところから小説の世界は〈行き違い〉は復活させるようにおもえる。現実の行き違いが〈異和〉であるなら話はそこで終わってしまうが、〈行き違い〉はすべてのこと始まりではないのか。ギリシア悲劇もシェイクスピア悲劇も歌舞伎の悲劇も〈行き違い〉から始まるのではないのか。

生誕百年　神戸から島尾敏雄を語る

〈異和〉だけでは、どうしても理解できない島尾の作品というものがある。

「僕がどんなに人なつっこくても、貝殻たちは固く蓋を閉じてしまう。そして黒や白のいぼいぼの背中を押し並べて、残丘からその傾斜にかけて、くっついていた。貝殻の家の中の営みはそれぞれに重量を持っているであろうのに、中の灯りはみんな下の方を向かってたよりなく気に幅の狭い光を投げかけていた。僕の手許にはどんな光も届いて来ない。僕は自分の居場所の位地の高さで、それだけの悲しみを食べ、涙を落した」（「宿定め」一九五〇年一月「近代文学」）

この作品からは存在の〈いきちがい〉を感じる。ここには〈異和〉というものはない。異和があるから人間は悲しくなるのではなく、〈いきちがい〉があるから悲しいのだとおもう。感受性の違いかもしれないが、吉本は「この涙は他者にとってはどうしようもなく唐突だ。ここのところがこの作品の難解さのかなめになっている。「僕の落した涙は、ただ存在自体から〈物理的〉に溢れてきているとしか思えない」という。そして、「じぶんの生理的な〈自然〉そのものが、異変において孤独だから」と自然科学的な解釈を付け加える。私の認識では、悲しみとは〈愛するものと愛されるものとのいきちがい〉、〈生と死のいきちがい〉、〈書く自分と書かれる自分とのいきちがい〉等々であると思われるのである。

ところが、島尾の小説では〈行き違い〉のことの運びを〈異和〉の空間に読者を解き放つ一瞬がある。それは島尾の小説の罠でもあり、読者はそれまでのなめらかな日常ストーリーからストップモーションに一瞬閉じ込められてから異空間に放り出される感覚になる。

「石像歩きだす」という一九四六年二九歳の短編を読んでみると、荒削りではあるが一瞬閉じ込められた異空間から次の展開が見えてくる。自己分裂がはじまるのだ。しかしそれは細胞分裂のようにではなく、見る自分とみられる自分の〈いきちがい〉として発生する。

「それは一つの方向ばかりではなしにいちどに四方八方手がつけられぬ工会に空気が割れた。私はその瞬間身体つきを猫のように地にはわせて空を見上げた。その格好はちょうど兵隊が不慮の兆候に対して状況判断する時の物なれた格好に似ていた。それは恐怖とか善悪の実感に先立ってそんな姿勢をとる習慣をつけられていたからだ。私は自分の姿勢にも過去の匂いが強くしみ込んでいることをこげ臭く感じていた。そしてそんな姿勢の私の眼は真赤に焼けただれた空が一面に燃えているのを見た」（中略）「私は海の方に逃げた。なぜ、海の方に逃げたのだろう。やがて私は海の上に浮かんでいた」

そこから再び平凡な日常に帰ってくる。

「今、私は身体と離れた位置に、自分の紺サージの士官服と士官服をじっと見つめている眼を持っていた。」

すると、突然知らぬ男が「いつまでそんなもの着とるんかあ」とつかみかかる。しかし、誰もが沈黙して見て見ぬふりをして通り過ぎる。

ところが、もう一人の男がハンマーを持ってやってくる。（見覚えのある男）自分がやられると思った瞬間、もう一人の男はしつこくついてきた男の頭の上にハンマーを打ちおろす。「しかし、ハンマーの男の眼は背中にもついていた」このハンマーの男の背中にも男の目が付いているということはどういうことだ。ハンマーの男は離れた位置から見つめる自分と見つめられる自分の〈いきちがい〉をさらに行き違う、自己分裂なのだろうか。酒場に入り座敷に上がる。

「そこにはむやみに自分を寂しく見下げはてた自分がいた。そこへハンマーを持った男が入ってくる。警察がやってきてハンマーの男は川に逃げ射殺された。橋の上から見物客が劇を見るように手をたたいている。

「私は微熱の状態で、別のある高台のアスファルトの道を歩いていた」やがて、私の頭は二つに割れて、「そんなことではだめだ」という自分と「そのとおりだ」という自分の自己分裂がはじまる。

この小説はすべて偶然の行き違いでできているが変にリアリティーがあり、作り話には思えない。なぜなら、総ての物語を作り話だといして偶然の行き違いが打ち砕いてゆくからだ。現実には物語なんてない。あるのは偶然と行き違いだけだ。われわれは物語よりこの偶然と行き違いのほうに現実を感じる。物語はつまりは作り話という嘘でしかない。島尾敏雄の小説はデタラメな日常を写真機のように切り取る。そしてカメラマンの真実は遠近法をぶっ潰すことだ。つまり書くことにおいても撮影することにおいても切り取るということは遠近法を覆すことだ。遠近法は空間の物語だから。この手法は現実のような私小説に見せかける虚構「死の棘」で実験されて完成されてゆく。

高台のアスファルトの道を歩いてゆくと、二つの頭が物質としてくっついて一つの大きな石像に変わってゆく。二つの物質の一つはツラであり、もう一つの物質はオマだということだ。そこにス（酢）の匂いがしてきて、ふたつをくっつける。石像サカノウエタムラマルは「つら・おま・す」という。この不思議な感触は何だろと思う。物語にはない、あるいは、物語に消されることのない現実感というものだろう。滑稽だがここにはある暗示が潜んでいるように思える。島尾敏雄によると妻のミホが発作に襲われる時、それは神がかり的になることかもしれないが、発作の前に彼女の顔に石の仮面のような表情がはじまり、そして爆発する。小説を読み書きする世界は彼女の治療法になるが、「石像歩きだす」を書いた島尾敏雄にも同じ素地があることがうかがえる。

現実の〈行き違い〉が〈異和〉となって行き詰まり、死の様相を帯びてくる。すると幽体離脱現象のようにもう一人の自分が現れてくる。島尾敏雄は妻ミホの中に同じ〈資質〉をみつけており二人は普通の夫婦関係より強烈な関係を結んでいる。その〈資質〉を共有する島尾敏雄も同じ病理で書くことの中で神がかりになっていく。書くことは狂うことだともいえる。

吉本隆明は評論家としてモノ的に存在するものとして〈異和〉を観察する。モノ的に認識する吉本の文章は流れるようには書かれていない。したがって読者は彼の文章を方程式として読むしかない。それに対して島尾敏雄の文章は軽い流れの中に読者を引き込み、大海の限りなく遠くまで読者を運び去る。海まで運ばれた読者はいきなり打ち寄せてくる海の波に出会って永遠の宇宙に解き放たれて遊泳する。まるで胎内回帰のようだ。

そのような作品に「月下の渦潮」（1948年8月21日刊「近代文学」三二歳時）がある。

「そして、その後に続く十六夜。以下の月々。とろりとした月下の海の羊羹のようなうねりの中では、あのように海水を巻き込む渦巻が巻いていている個所がある。その渦に知らず知らず吸い寄せられていくような、そしてその渦潮の一番外側の土手の頂点に乗ってその次に来る傾斜にすべり巻き込まれる時のくらくらした三半規管がどうかしてしまうめくるめき、それが非常に誘惑的に浜小根に印象されていることを思った。そんな渦潮に普段は気がつかない」（小説最終部）

この羊羹のような風景は島尾の小説には何度も出てくる風景である。島尾がミホを連れて東京から奄美に戻るときにもこの風景は洋上の船からの状況として懐かしく現われる。そのようにして、島尾敏雄は〈異和〉から地球を裏返すような小説の航海に出ることができる。

「大海原のただ中に一個の人智の限界が翻弄され、大きな揺れが彼女の肉体に響いてくると、妻は言いようのない陶酔を覚えるようであった。その場合私の方は多少船酔いのために悩んでいる方がよかったようだ。すると妻は私を介抱し始めたのだ。（中略）私たちは明らかに異なった圏内に踏み込んだことを知らないわけにはいかない。それはからだ全体が（或いはこころをゆさぶりかねぬほど）一種の違和の感じでしびれて来た。違和と言っても不快というのではなく、新しい場所に出て行くための晦冥の中のめくるめき酔いの気分に近く、いわば私らは脱皮したのであった。すでに私たちの選びとった大洋の中の離れに島である小さな奄美大島が急速度に眼の前に大写しになって来た」（「妻への祈り」「婦人公論」一九五六年四〇歳時）

これらはまさに狂う島への接近である。

生誕百年　神戸から島尾敏雄を語る

「作品：夜の匂い」に島尾は夢の中に予言を埋め込みようになる。〈異和〉は〈夢〉を生み〈夢〉は〈異和〉めいてくる。

こげた色の戦争があり、ニワトリを焼いたような臭いを放ちながらアメリカ兵の死体が開かぬパラシュートを機体にからませて落ちてくる。これが島尾敏雄が見た唯一の戦死体かもしれない。このような敵機の墜落からはじまる「夜の匂い」（1952年4月に「群像」に三五歳時に発表された）作品では戦争期の〈行き違い〉に翻弄され、ついには戦局の行き違いのまま終戦を迎える島尾の〈異和〉が綴られている。それら行き違いの最高のことは死ななかった戦後ということになるだろう。しかし、それらの行き違いが消えるとそれを最後に書けなくなるわけではない。小説は事件によって展開することもあるが、もし日常が動かずに〈異和〉に沈んだら、動かぬ日常を夢に溶かして現実の偶然のごとく夢のごとく書くことができる。

小説「夜の匂い」は後半においてミホとの関係を怪しく予言する形になってゆく。

「木滋は二人の女の方を見た。背中にランプの明かりを受けて立った二人の女性の四本の足がレントゲン写真のようにすけて見えた。理恵の二本の足がやせて細く見えた。それは理恵には気付かないことであった。桂子を負ぶって歩き出すと理恵が縁側からはだしで庭先にとびおりて、ぽっと白くほの浮いている浜木綿の群れのぽきぽき折って木滋への贈り物にした。桂子を負ぶって木滋の手はふさがっているので、それは桂子が持つことにした。

（中略）

木滋は理恵の不吉な狂乱の姿を妄想した。ユタ神に疲れた理恵が髪ふり乱して夜の浜辺を疾走しているように思えた」

理恵は小学校の先生で桂子はその生徒という状況設定である。おそらく、作家は恋愛対象の位相をっとい過去にまでさかのぼって見極めようとしたのだろう。舞台は奄美であり、東京での修羅場はとっくに過ぎ去った過去であるにもかかわらず、奄美の時代に戻って将来を予言する。なぜなら小説の時間設定では時間を飛び越えることができるからである。この小説をノンフィクションとして読むとおかしなことになる。

フィクションだから結果の分かっていることを小説の世界では〈小説の今〉として書くこともできるのだ。〈小説の今〉は〈現実の今〉とは違うのである。予言が過去にさかのぼってなされるのは、現実ではない虚構の証拠である。

予言的作品「月暈」は目立つことなく潜んでいる。これは「死の棘」の〈恋愛地獄〉の作品を暗示的に予告しているといわれている。虚構の地上では天変地異が起こっている。

「おそらくSのせっかち身勝手の欲望からしつこくZ夫人に求め過ぎていることになっているので、Sの環境にそれだけの条件が熟していても、Z夫人の側では他人ごとであることは充分考えられる。

（中略）

所詮禁止の林檎を食ってはまり込んだ意識の沼にあがいている人間の皮膚の繊細さが、もうどんなショックもその本来の強さが感じられずに、いつまでももの足りぬ弱さとしてしか感じられない。

（中略）

色彩もあると思えばありないと思えば、ない。その花にも色が付いていたが、それを言い現わすことは出来ない。そこにひょろっと小さな花が咲いていたことはSの心をやわらげる。金属的に堅く傾いている気持ちにほんのり生気を吹き込まれて、Sは思わず闇の中で微笑んだ。Sは両の掌でその花を囲うようにし、しかしその花びらにも茎にも手をふれずに、頬を掌で囲んだ花の方にすりよせるようにした。血の気を失い透き徹った皮膚の感じのその花びらに淡い匂いがあり唇を開いて待つようにも見える」

この文章は読む者の品格を映し出す鏡のようである。これをもって同人誌の仲間の淡い恋心と見るのか、不倫の証拠と見るのか？

この部分を吉本隆明が読み飛ばしていることには意味があると思う。ここには涙を落したことの意味のわからなかった〈存在のいきちがい〉があったのだ。（「品定め」1950年1月「近代文学」）

生誕百年　神戸から島尾敏雄を語る

2017年10月21日神戸文学館で行われた「神戸から島尾敏雄を問うリレートーク」イベント。写真右から喜山荘一、高木敏克、前利潔、大橋愛由等

月暈（げつうん）とは淡い月の周りにできるフレアーのことらしい。島尾はそれをこの小説で象徴的に掌の動きで現わしている。同人誌の中の恋が淡い恋かもしれないし片思いの恋かもしれない。死の棘との関係が面白い。

夢屑一九八五年三月短編集六八歳時（死ぬ前の年）の作品は〈生と死〉の〈いきちがい〉の夢を表現している。

「私は撃たれてひっくり返った。おかしなきもちだが痛みはない。なお飽き足らぬと見た敵兵の一人が、剣で私の顔を剥ぎ、肺や心臓も摘出して解体したのだ。顔や内臓のない血だらけの死体の私は川に投げ込まれた。流れにつれ川は次第に大きくなり、私は岸にいた一人の男の方に流れ寄って行った。こんなおどろの姿ではきっと男は肝をつぶすにちがいないと思えたのに、持っていた竿で私を引き寄せようとするではないか。肥やしにするには汚いものほどいいなどと言っているのだ。私は上手くすり抜けて男の竿をのがれ、広い海に漂い出た」

ここには、さまざまな〈いきちがい〉の悲しみがある。まずは、何も相手に危害を加えようとしていないのに、軽々と殺されてしまう的と自分と相手との心の〈いきちがい〉。これだけで何と悲しいことか！これは、愛するものと愛されるものとの〈くいきちがい〉の逆だ。憎む者と憎まれるものとのこころの〈いきちがい〉。殺すものと殺されるものとのこころの〈くいきちがい〉そしてさらに悲しいのは死んでゆく自分とそれを見ている自分との〈いきちがい〉死んでいく自分とそれを見届ける分裂したもう一人の自分との〈いきちがい〉　それらすべての〈いきちがい〉を何層にも重ねて、書く自分と書かれる自分が自己分裂してゆく小説家島尾敏雄の〈くいきちがい〉悲しみ。死にゆく悲しみを抱えた人間の人生は泡沫のインテルメッツォにすぎない。総ては最後に行き違うのだ。〈私〉は身体を持たない所在ないひとつの「眼」になっていきちがい宙をさまよう「悲しみ」なのだ。

蛇足になるが、神戸からの視点というのは、東京からの視点とも奄美からの視点とも位相が違うと思う。神戸からの視点ということは〈存在の行き違い〉によって生ずるもう一つの視点、つまり生きている自分から遊離して浮遊する作家の視点だとおもう。私にとっての神戸は虚構の町であり、神戸の魅力はその虚構性にある。私は無意識のうちにその虚構に酔い、中毒にかかっている。だからこそ神戸から出ようなどといちども思ったことがない。神戸に土着性があるとしたら、夢の浮島ということだ。

高木敏克（たかぎ・としかつ）
小説家。第4回 神戸文学賞授賞。2016年度 神戸新聞文芸最優秀 授賞。文学同人誌「漿」主宰（現在休刊中）著作に『暗箱の中のなめらかな回転』、『白い迷路から』ほか。「月刊神戸っ子」などの雑誌に執筆。芦屋大学講師、保険コンサルタント

島尾敏尾の琉求弧

喜山荘一

1. ふいに書かれた「琉球弧」

知るにつれ驚いたのは、奄美大島から与論島までを「ひっくるめた総合的な名前が見当たらない」（「アマミと呼ばれる島々」）ことだった。

「奄美（群島）」があるではないかと思われるかもしれない。しかし、島尾敏雄は気づかずにはいなかった。「奄美」や「奄美群島」では「強いてひとまとめにしようとする意図が目立って、生活感情の中からしぜんに生まれてきた言い方ではない」（同前）。「沖永良部島や与論島で、自分の島が奄美と呼ばれていることを知ったのは、やっと昭和に入ってから」（「南島について思うこと」）と言われている。「観念的にはアマミの中の一つだと理解していても、島々のあいだに差異が多く、何となく実感としてぴたりとこない」（同前）。それどころか、「ひとまとめにして奄美と呼ばれることを拒んでいるようにも見える」（「加計呂麻島呑之浦」）くらいなのだ。

島尾が奄美大島に移住して、最初にぶつかったもののひとつは呼称だった。しかも「総合的な名前」を持たないのは島々についてだけではなかった。それより前に、島尾は加計呂麻島の島人が、島を自分の住む集落（シマ）の名で呼びこそすれ、「島そのもの」が「かけろま」と呼ばれることを知らなかったことに驚いていた。「総合的な名前」を持たないのは、島々だけではなく、ひとつの島自体についても言えることがあったのだ。

島人が島の名を持たなかったのは、おそらく加計呂麻島に限ったことではなく、奄美大島もそうだった。島を「島」と表記したのは大和朝廷だったし、「大島」にしても元は大和や沖縄島からの呼称だろう。加計呂麻の島人が島を集落（シマ）の名でしか呼ばなかったように、奄美大島の島人も集落（シマ）の名でしか呼んでこなかった。島全体を捉えて呼ぶ必然性がなかったからだ。

琉球弧の北に位置する奄美大島は、島人の必然性が、島全体を捉えるようになる前に、主に大和からの視線に捉えられ、最初に「海見」、次に「大島」、そして近代以降に「奄美大島」と呼ばれるようになった。その間、按司（首長）的な存在が島々をまとめあげることもなかった。

「奄美」という言葉自体が、内発的な呼称として奄美大島全体に行き渡った歴史を持っていない。島人による政治的共同体が「奄美」の島々を圏域とした歴史もない。これが、今に至るも「奄美群島」が、そう呼ばれつつも「総合的な名前」として根を下ろさず、また他に「総合的な名前」も持っていない経緯だ。

ともあれ島尾は呼称の不在という不思議さに触れて、むしろ呼称について鋭敏になった。島々について言う場合、「奄美」ではなく「アマミ」というカタカナ表記にしたのはその試みのひとつだ。

そのうえそこには、もうひとつ「琉球」に関わる問題もあった。一六〇九年の侵攻以降、薩摩に組み入れられた歴史をもつから、「奄美には沖縄的なものを拒否したい気持とそれに帰納したい願望とが相反しつつ同居している複合の状態のあることも認めなければならない」（「私の中の琉球弧」）。島尾はそこで「琉球」という言葉が現地で受け入れられないのを察するようになる。

しかし島尾は、もとより「南島」という言い方が好きで、奄美大島のことも、「花ざかりのかたちをした南島の群れのひとつ」（「九年目の島の春」）として見ているし、「奄美」を主語にしても「沖縄」を主語にしても、それは象徴でしかなく、断らない限りそこにはいつも奄美、沖縄、宮古、八重山の全体に浸透させようとする目を持っていた。こうして「南島」という「少しあいまいな表現」（同前）ではなく、より照準を合わせようとする試行のなかで、「琉球弧」という言葉がつかまれることになった。

奄美大島に移住して五年ほど経った一九六〇年、「南島探検の過程の報告書」と位置づけた本のあとがきで、島尾はこう書いている。

現在では私は、大島のほかの四つの島の徳之島も喜界島も沖永良部島も与論島もひととおり見てきましたので、それぞれの島の輪郭をひとつずつ描くことによって、大島との対比の中で琉球弧の北の部分としてのアマミをつかみたいという期待に充たされて居ります。（「離島の幸福・離島の不幸　あとがき」）

この初出の「琉球弧」は筆の勢いでふいに書かれているようにも見えるし、それから一年後の「奄美の妹たち」の本文で紹介されることになる「琉球弧」という概念は、このときすでに掌中にあったようにも見える。もし後者だとしたという概念は、このときすでに掌中にあったようにも見える。もし後者だとしたら、この「あとがき」の「琉球弧」はとても控えめな初出だ。しかし、実のところその印象は本文でお披露目した「奄美の妹たち」でも変わらない。なにしろ、「「琉球弧」といわれる奄美から沖縄、先島にかけての南島」と、括弧で強調しているものの、すでに「琉球弧」という言葉が流布されているのを前提としたような書き出しなのだ。

この控えめな態度は、琉球弧について書くとき、終始変わらなかったと言っていい。しかし、態度は控えめでも「琉球弧」は、やわらかで強力な概念だった。この言葉がなければ、わたしも、島尾と同じように座りのいい呼称の不在に突き当たるしかなかっただろう。

「琉球弧」は、島尾が沖縄を訪ねる前に、「奄美」の島々を見聞するなかで、沖縄、宮古、八重山にも通じるものを予見した言葉であり、かつその過程で、呼称の不在や「琉球」に対する島人の抵抗感を通じて掴まれたことからすれば、奄美的な用語だった。あるいは、「琉球」という言葉に対する反発を、島尾は沖縄自身にも見出すことからいえば、とくに宮古や八重山から発されたとしても不思議ではなかった。また、「奄美、沖縄、宮古、八重山」という言い方では、ひとまとめにならないし、主島と離島という考えを伏在させてしまうことからすれば、それぞれの島を主体に据えた、それこそ島発の言葉と言ってよかった。

2. すぐに続いた「ヤポネシア」

一九六一年の春、「奄美の妹たち」で「琉球弧」の概念を提示した島尾は、はやくもその年の冬には、日本列島を表現するもうひとつの言葉として「ヤポネシア」（「ヤポネシアの根っこ」）を提唱し、その南の部分として「琉球弧」を位置づけてみせた。ふたつの概念はほぼ同時期に提示されたのだ。

これは不思議なことではなかった。島尾は、奄美大島へ移住する際も、千葉あるいは東京を離れたとは書かずに、「本州島を離れた」（「奄美大島から」）と書く人である。もともと宇宙の高度から降ろすような視線は彼のものだった。だから、「琉球弧」という言葉を編み出す前から、島々を「九州島と台湾島の北端の間に連なるこの島々」（「南西の列島の事など」）と「天界からの俯瞰」（同前）で見ていたし、また、「島々を結んだ線は、こころよいたるみをもって張られた縄のように、浅いカーブをこしらえながら、台湾島の方に手をさしのべています」（「鹿児島県立図書館奄美分館が設置されて」）と、物や人のように感覚的に捉えようともしていた。

この、島々の連なりとして捉える視点が、南太平洋の島について書かれた人類学者の本を読む機会を得て、そこの「南島群」が「何とわれわれの列島の南底部に孤独なすがたで配置された小さな島々と似ていることか」（「南島について思うこと」）という気づきを得れば、もともと日本列島を「花綵列島」と表現した人である、「三つの弓なりの花かざりで組み合わされたヤポネシア」（「ヤポネシアの根っこ」）という発想にたどり着くのはすぐのことだっただろう。

「天界からの俯瞰」をものにしていた島尾にとって、「琉球弧」も「ヤポネシア」もつかみ取るのは自然なことだった。しかし、そこに名づけを行なったことで見えてきたものは骨太で大きかった。

「琉球弧」と「ヤポネシア」の概念を提示した翌一九六二年、島尾は奄美大島で「私の見た奄美」という講演を行っている。そこで島尾は、「なにか日本の歴史の重要な曲り角の時には、必ずと言ってもいいほど南の島々のあたりが顔を出して来る」と指摘している。

「続日本記」には奄美、夜久、度感、信覚、求美などと、南の島の名が出てくる。そのことについて島尾は、「日本列島の中に国家らしい国家ができたその時に、南の島の記録をはぶくことができなかったということは、やはり重要な意味を含んでいると私は考えるのです」と語っている。

日本の初期神話に南島の顔ぶれが出てくるところは、大和朝廷の版図が琉球弧にも及んだことを示す証左として引用されるのが常だ。しかし彼は、「何かを感じとったから記録として残したのだと思います」と、そこに別の余剰を見ようとしている。そして、にもかかわらずその後は「本土のほうと全く切り離されて」しまう、と続けている。

「鉄砲」は、「種子島」から入ってきたが、それはヨーロッパの文明の象徴と言えるもので、中国の儒教やインドの仏教と「同じ比重でもって」捉える必要がある。日本の音楽に大きな影響を与えた「三味線」も「沖縄」から入ってきたものだ。

鎖国の終わりも、発端はアメリカの軍艦が「ふらふらはいって来たところが浦賀」だったわけではなくて、「まず沖縄の那覇にやって来て、そこを根拠地にし充分足がかりにしたそのうえで、日本本土のほうにやって」来ている。その後の新しい政府にしても、「薩摩藩は南島を犠牲にすることによって明治維新を動かすことができた」。さらに第二次世界大戦でも「南の島々を犠牲にすることによって、国家がどうやら安泰であるような方向」を見つけることができ、

「それは現在もつづいている」。

つまり、「日本の大きな曲がりかど」では、南の島々から「本土のほうになにかしらざわめきのサインをなげてよこす」。しかしその顛末は南島の「犠牲のかたちに傾きがち」であり、「本土のほうはそのことにも、その地帯のことにもほとんど理解をよせようとしないように見える」。島尾は、このことは「私に強い感動をあたえてよこす」と話している。

ここまでくれば、五十五年前に行われた島尾の講演が、鋭く現在を照射にしていることに驚かざるをえない。本来、ヤポネシアという視野は、大陸との関係で捉えられがちな日本を太平洋の島々のひとつに解放するというモチーフを持っているから、ここでの文脈は「ヤポネシア」というより「日本という国家」に沿ったものだが、しかしここには、中心に凝集しようとする「日本」に対して、個々の島を等価に捉える「ヤポネシア」の視線が息づいているのを見ることができる。

やがて島尾は、琉球弧と「東北」のあいだに「なにか類似の気分の流れている」のに気づいていく（「琉球弧の視点から」）。そしてここでいう「東北」には「アイヌ世界が透絵さながらにうずくまっているようなもの」（同前）だった。東北といえば、福島が島尾敏雄の両親の出身地である。この出身への足場を得たことでと言っていいだろうか、島尾の言葉はいつになく熱を帯びることもあった。

> （前略）私が言いたいことをいそいで言ってしまえば、たとえこれまでの日本人の目の位置が九州から関東までしかその視野に入れることができなかったとしても、私はそれに服したくないこと。東北や琉球弧が負のかたちでもっている日本の要素をはっきりつかみだすのでなければ、日本のかたちはいびつでしかないこと、の二点だ。（「私にとって沖縄とは何か」）

東北や琉球弧が負性として持つ要素を掴むのでなければ、日本の「かたち」はいびつでしかないという熱を帯びた主張は、これも今でも生き生きとしているのに立ち止まらないわけにいかない。

しかし、ご当人のその後の態度はそれとは別のところにあった。一九七三年、「非小説」を集成した本の「あとがき」で、学んだことは「ヤポネシア・琉球弧の視点」かもしれないとして、島尾はこう整理している。

最初は、「用語の発見のための試行が重ねられている」。用語が現れる前は、「南島への心情の過多を処理しかねている」。そしてこう続く。「それはやがて用語の出現と共に、いったんは或る安定を得たあとで、今度は次第に南島に対する心情の発露の臆病な傾斜へと傾いて行くのである」（「島尾敏雄非小説集成」第一巻）。「臆病な傾斜」とは、「憂鬱な旅人の不安定な感受」（「琉球弧の吸引的魅力」）が、あとがきを書くタイミングで言わせたものかもしれない。このときには、奄美大島を離れる心づもりになっていたことも想像される。

しかし、「ヤポネシア・琉球弧の視点」を提示した人の総括としては、あまりに控えめで、本人の深刻さをよそに、わたしはこのところで思わず笑ってしまった。

「ヤポネシア」にしろ「琉球弧」にしろ、いまも充実を待っている魅力的なコンセプトであることに変わりはない。そして彼の「非小説」群は琉球弧に大きな励ましを与えてきた。ことに「奄美」に対する寄与は大きい。もし島尾敏雄がいなければ、「奄美」はいま以上に「沈黙」のベールをまとい続けていただろう。

3. 奄美への寄与

島尾は地元紙で、「奄美群島は文学的表現を試みる者にとって」「最も適切な宝箱だ」として、奄美発の小説に丁寧な書評を行い、「群島地帯の文学的表現を期待に満ちたものとして見ている」（「奄美群島を果して文学的に表現し得るか？」）と、エールを送っている。その後も折に触れて書評を書き、去った人へは追悼を寄せた。その視野が本格的だったのは、「琉球弧初の芥川賞受賞作品への言及のなかでの、「琉球弧を表現した近代の文学的成果において、私たちは詩の山之口獏を持つだけではないのか」（「大城立裕氏の芥川受賞の事」）という指摘や、『奄美に生きる日本の古代文化』についての、「金久正の著書ほど奄美の文化の根を正確につかみだしたものを見つけることはできません」（「金久正の事」）という評価が正鵠を射ていることにも示されている。

しかし、大きな作家だということを知らない島人にとっては、島尾敏雄は何より、図書館の館長さんだったのではないだろうか。そしてこの館長さんはアクティブだった。

彼が初代館長になった「県立図書館奄美分館」は、名瀬の島人に図書を提供するだけではなく、二百キロの距離に散らばる島々に向けて「巡回貸出」を行った。「図書館は書庫に書物をしまいこんで閲覧者のやってくるのを待ってばかりいないで、町や村のすみずみにまで、船やジープや自転車で書物を持ちこんで、それぞれの家庭に配って行くところまで行かなければならないとさえ考えられています」（「最近の図書館の動向」）と、島尾は書いている。控えめな彼は受け身で書いているが、わたしたちは「巡回貸出文庫」にも、大は小を兼ねるとは見なさない「琉球弧」の思想が息づいているのを感じることができる。

そればかりではない。島尾は「奄美郷土研究会」を発足させ、例会を開き会報を発行している。「読書会」も開催した。実に、「奄美」で文字を読む、文字を通じて島を考える環境を整えていったのは島尾敏雄だったのだ。

そのうえ「長いあいだ自分たちの島が値打ちのない島だと思いこむことになれてきた」（「奄美―日本の南島」）奄美を、島尾はかばい続けた。

奄美の島人が口にしにくいことでいえば、「薩摩藩が島々にのぞんだ方策が、どれほどかたよったものであったかは、歴史が明らかにするだろう」（「奄美・沖縄・本土」）という主張がそうだった。また、「琉球弧」というコンセプトを梃にしたときには、「琉球弧は本州弧のペンダントではない」（「琉球弧に住んで十六年」）、「独立政権を持っていた琉球や、まつろわぬ蝦夷地の東北が、日本歴史の展開にどれほども役立たなかった異域だなどと考えることは私にはできない」（「奄美・沖縄の個性の発掘」）と強い口調にもなっていった。

「結論として日本と言えなければ日本でないと言ってもいいじゃないか」（「琉球弧の感受」）、「奄美と沖縄とで一緒になって独立してもかまわないのですね」（「明治百年と奄美」）とまで言ってのけることすらあった。

つい、威勢のいいことを口走ったのではない。

島人は「自立の精神が欠けている」（「多くの可能性を秘めた島々」）とよく言われる評言に向かって、それがないのではなく、「深い所での屈折」があって、「対外的な表現の場で、よろけるのではないか」という観察と洞察に裏打ちされた励ましでもあったのだ。

しかし、奄美に対して冷静な目を向けた島尾もいる。「奄美は訴える」というタイトルなのに、中身は「奄美に訴える」ことの方を多く書いているからだろう、目立つのを避けるように書いている節もある。しかし、実は「奄美に訴える」ことも率直に開陳されていた。

なかでも真っ芯で捉えているのは、島人の精神性を「事大主義と権威の否定とがひとつの精神の中に同居していてそのゆれ動きが激しい」（「多くの可能性を秘めた島々」）と捉えてみせたことだ。「事大主義」は伊波普猷をはじめ、沖縄の知識人が指摘してきたことだが、そこには二重性のあることを島尾は見出している。彼はそれを「アマミ・コンプレックス」と名づけた。

「島びとの鹿児島人に対するコンプレックスは単純ではない」（「加計呂麻島」）。たとえば、奄美の島々では西郷隆盛が敬愛されていると言われるが、島尾はそこにも「救い難いコンプレックス」（「名瀬の正月」）があるのを見逃していない。反発を呼び起こさずにはすまない形でしか敬愛も発露されないということだ。

事大主義の側面では、「ヤマトもしくは日本の中にとけこみたいという姿勢の強かったことは否むことができず、むしろそれはヤマトからの蔑視ないしは無視となって返ってきた」（「琉球弧に住んで十六年」）。それは身近なところでも反復されて、「奄美と沖縄のあいだでさえも、沖縄の人は奄美の人を、「鹿児島ンチュづらをして好かん。シマンチュのくせして」と言いますし、奄美の人は又南を順繰りにばかにして、「沖縄は野蛮だ。奄美は琉球じゃない」と言います」（「琉球弧の感受」）、という状況を生むことになる。

島尾が「琉球弧」という用語を編み出したのには、「琉球」という言葉が受け入れられないということも踏まえてのことだった。しかし島尾はそのことを、実は「ふしぎな状況」（「沖縄らしさ」）と見ていた。なぜなら奄美には「琉球弧的体質がある」（「琉球弧から」）のだから。

> 奄美がこれまで持っていた意識下の親近感を、もっと意識的な理解に深めなければなるまい。沖縄復帰の反動としての奄美陥没の恐れは、沖縄を知らないことから生ずる面も少なくない。（「沖縄をもっと知る必要」）

その通りだ。島尾の洞察をもとにすれば、「事大主義」の裏側には「権威の否定」が張り付いていた。それを手がかりにすれば、「権威の否定」をもっと踏み抜いて、自分たちの島々を等身大で肯定的に受け入れるという脱出口すら見えてくる。

そのうえ島尾はこの二重性を、「爆発的な気性の激しさとともに、その一般的なあふれるばかりのやさしさは他地方では珍しいこと」（「南島について思うこと」）と資質に近いところで捉えることも忘れていなかった。わたしたちは島尾の奄美（琉球弧）洞察を、島人の自己理解への助けとして受け取ることができるのだ。こうした奄美や琉球弧に対して向けられた言葉には、かばってくれたこと以上に糧となるものが宿っていると思える。

ところで、奄美大島に移住して十一年経った一九六七年、島尾は琉球弧について「総合的な報告」（「奄美を手がかりにした気ままな想念」）を書きたいという思いを抱く。しかし、「その心づもりで島々に向かうと、島は私の手のとどかないところに逃げ去ってしまう」（「私の中の琉球弧」）という実感に囚われてしまう。それはその後も身を離れず、離れないどころか強まり、「何も書きたくない」（「島尾敏雄非小説集成」第一巻）ところまで落ち込み、ついには島を離れ、「遠くから見直した揚げ句に最後に残るものを待ち受ける姿勢」（「「奄美の文化」編纂経緯」）に移っていくことになった。

しかし、わたしたちは「報告」はなかったのではなく、果たされたと受け止めることはできると思える。この構想が生まれる五年前、一九六二年に行った講演録「私の見た奄美」がそれだ。

これは島尾がまだ沖縄に行っていない段階で行われたものであり、その意味では「総合的」とは言えないからと島尾は不服だろう。けれど、前に見たように、そこには現在でも組み尽くせていない野太い歴史観が展開されているし、それを支える「琉球弧」と「ヤポネシア」という生まれたばかりのコンセプトものびやいだ力を発揮している。この講演録は、短い南島エッセイのなかにあって、最も長い文章のひとつだ。もちろん長いからいいというのではなく、伝えるべきことを伝えた豊かさも語りの熱もある。これで充分ではないかと思えるのだ。

わたしたちはそれを欠いていると思う必要はない。島尾の琉球弧報告は、「私の見た奄美」に披歴されているのだ。付け加えれば、奄美、いや琉球弧をかばう点からは「中学卒業生への或る感想」がいい。これは中学や高校を卒業したら生まれ島をひとたびは出ざるを得ない島人にとって、いまでも大きな励ましになる文章だ。

4. 挫折の背景

琉球弧の「総合的な報告」を思い立って以降、島尾はほぼ同じ言い方で繰り返し、「奄美についてなにかを書くと、奄美の実体は私の手を逃がれ遠くの方に去って行き、手のとどかぬところのものになってしまう」（「奄美・沖縄の個性の発掘」）と書いている。

移住する直前には、「ぼくは沖縄に生れなかったことを後悔しているといってもいい」（「「沖縄」の意味するもの」）と吐露し、「いま島々は、しきりに私を呼び、私はふたたびその島々に、渡っていこうとしている」（「加計呂麻島」）と書いた島尾だった。この初発の心は、南の島へ移住する人が口にすることと変わりはなかった。けれど島の内側へ入り込み、島人の目を持とうとすると、島人は旅人の彼を排除してしまう。

「私はそれをどんなにか自分の手でつかみとってみたい、と思ったことだろう」（「初発のものへの羨望」）。けれどその願いは適えられない。

たとえば島のなかの、どこかの部落にはいって行くと、その入り口に近づいたとたん、そのときまで空間いっぱいに触手をのばしひろげ、呼吸していた島の生活の放散が、つと急速に収縮してかたい一個の珊瑚石灰岩と化してしまう。どうしても開花のただなかに身を沈めて、その揺れをともにすることができない。私がその部落を立ち去ると、私の背後で音もなくそれはその固縛をほどく。（「離れに暮らして」）

要するに、まっとうに島に当てられたのだ。

島尾は島の野生に惹かれていた。それを象徴するのは「はだし」だ。

（前略）つい目の前を女が二人はだしで歩いて行く。骨ばった色のくろい足だ。若い方が古くなったスカートを右手でたくしあげるようにしていたので、ひざのところが見えかくれした。オーバーもレインコートもつけず、傘もささず、雨にぬれたまま、別に急ぐでもなく、色目の悪いかかとで、ぬかった道を交互にふみつけていた。その冷えこみを私は自分のあしうらに感じた。或る感動が身内を走り、泥によごれた女たちの素足から目をはずすことができない。（「島の中と外」）

はだしで歩き雨に濡れるのもお構いなし。島尾は目を奪われるが、しかしそれはもう「町の中では見かけることが少なくなった」（同前）光景でもあった。近代化だ。

奄美の名瀬に移り住んだ直後に、島尾は「市内バスの少女の車掌が裸足のままで乗っているような風情は（地元の新聞はそのことをみっともないと揶揄したが）もう見たくても見られなくなった」（「名瀬の正月」）とも書いていた。

そして野生の象徴が「はだし」なら、近代化の象徴は「拡声器」だった。小山のいただきにすえつけられた拡声器からは、「朝な夕な、ときには夜ふけてからも、拡大されたふしぎなにんげんの声がそこからとびでてきて、私の頭の中の上にふりそそぐ」（「不思議な聴取計画」）のだった。島尾は耐えがたく思い、島人の賛同を得て「拡声器撤去の嘆願書」（「名瀬だより4島の中の町の現実」）まで作成して警察署に届けるが「きめ手はなかった」。やがて電灯がつき、島尾はテレビをおそれ便利におびえ、明日におびえた。

「島が本土と地つづきになる欲望に燃えたって」（「明日のおびえ―わが政治的直言」）、名瀬は「破壊と建設の交錯した騒々しい建設現場のような殺伐な風景」（「九年目の島の春」）と化していく。そしてついに「島のことがわからくなった」（「奄美の島から」）と思わざるを得なくなる。「海の向こうの欠落した日本の方から錆が流れつき、いつのまにか島々にべったり付着してしまっていた」（同前）と書いた一九七一年には、すでに奄美を離れる心の準備はできていたということだ。

島の共同体が旅人を排除するだけではなかった。島の全体も、島尾が心惹かれ、つかみたいと思う野生を削ぐように進んでいったのだ。

もっと島尾の生に肉迫していえば、「妻をとおして南島をのぞく」（「沖縄・先島の旅」）方法も採っていたのだから、半身に巨大な野生を抱えた妻のミホを通じて、島の野生を捉えることもできたのかもしれないが、島尾はそうはしなかったように見える。

風もいけなかった。奄美大島の冬は、気温はさほどでもないのに北風は肌に冷たく、島尾の望む「常夏」を感じさせてくれなかった。

しかし、「私は奄美のかたち（風土や人々の風貌と気質）を通してしか、ものの感受を生き生きとはたらかせることができなくなりました」（「奄美を手がかりにした気ままな想念」）と、まっとうに島に当てられているものの、そこから「総合的な報告」に至らなかったのは、それこそ「風土や人々の風貌と気質」しか手がかりがなかったことにも依るのかもしれなかった。

それというのも、沖縄に旅した島尾は、「憂鬱な旅人」ではなく生き生きし出すことが多いのだ。少なくとも、奄美大島のことを書くときとはちがう表情を見せるようになる。そこには望むような暖かな空気があった。それだけはなく、「風土や人々の風貌と気質」から生まれたかたちがあった。名瀬でもしばしば楽しんだ「沖縄芝居」があり、「女踊り」があり「城址」があった。島尾が沖縄で見出したのは、琉球弧を「解きあかす」（「風の怯えと那覇への逃れ」）ための、人間がつくった文物という媒介だった。

本土に移住してさらに風が堪えるようになった島尾は、那覇での「越冬」を思いつく。この思いつきはすぐに実行に移されて、しばしば冬を那覇で過ごすことになる。こうして書かれることになる一九七八年の「那覇からの便り」は、奄美大島に移住して数年後の一九五七年から連載した「名瀬だより」が深刻な面持ちで書かれているのに対して、島尾にしては軽やかで躍る心が感じられるものだった。

島尾は那覇の町筋のラビリンスに喜んで紛れ込んでいった。それはあたかも、いつの間にか「あの世」へ入り込んで楽しみふけるおとぎ話の主人公のようだった。

5. 逆向きの生

奄美大島に移住する直前に書いたのが「加計呂麻島」（一九五五年）という文章だった島尾は、符合させるように、奄美大島での最後の文章を「加計呂麻島呑之浦」（一九七五年）と題する。

島尾はそこで、「私は加計呂麻島にこそ住むべきであったかもしれぬ」と書いている。これはある意味でその通りだった。たどり着くのに時間がかかるという意味では、加計呂麻島は今でも離島らしさを失っておらず、野生の衰退と近代化の波は、北琉球弧最大の都市である名瀬に比べたらはるかにゆるやかにやって来ただろうから。しかしそれと同じ理由で、加計呂麻島では、島により強く当てられて疎外感もいっそう強まるのだとしたら、旅人の視線を立ち上げられなくなるのは同じだったかもしれない。それに、生はおいそれと選べるようにはできていない。

島に当てられることについて、島尾はこんな風に説明したことがあった。

島人は、「島の外から来た人をものすごく大事にする」（「回帰の想念・ヤポネシア」）から、「竜宮に行って来たような感じ」（同前）を本土の人は持つ。これは日本の型でもあるが、島ではそれが非常に強い。けれど、その気になって再訪してみると、「そっぽを向かれてしまった」ということもありうる。島には「島の外から来る者を受け入れないところも同時にある」。「まれ人を歓迎することは嘘じゃないんだけれども、その後も長くずっと引き続いて、とういうわけにはいかない」のだ。

これはそのまま島尾の体験でもあった。島尾は、敗戦に至る十か月余りを加計呂麻島で、奄美復帰の直後からの二十年近くを名瀬で過ごしたが、加計呂麻

は「竜宮」であり、名瀬に再訪するものの、そこは「竜宮」を閉じた島になっていた。島尾自身、「ずっと短かった加計呂麻での体験の方がむしろ底深く圧倒的である」（「加計呂麻島呑之浦」）としているくらいだ。

島尾は「古事記」一冊を持って加計呂麻島を訪れた。すると、島は「古事記」さながらに「太古の霧にとざされているふう」（「名瀬だより10民間信仰」）だった。「歴史の透明な場所」にやってきた島尾には、「身近の時代を素通りしてスサノオやヤマトタケルと同じ感情で当分のあいだ生活することが可能なよろこびがあった」（同前）。

しかも島尾は特攻隊の隊長なのだから、「まれ人」のなかのまれびととして、半身に野生を残した加計呂麻の島人から大いに歓迎されただろうことは想像に難くない。なかでも、島尾に応えたのは、巨大な野生の感性を抱えながら、万葉集を踏まえて歌を詠むこともできる、ちょっと当時の島では考えられない知識を持ったミホだった。スサノオ気分を満たしてくれるミホと、自分の知識と感性をぶつけても応答する力量を持った敏雄のふたりが出会ったのである。これだけの条件でも、ふたりの恋愛が神話的なベールをまとわせることになるのは想像するまでもない。まるで用意された舞台のようではないか。

しかし神話の英雄気取りは、突然訪れる敗戦で断絶し、後にはどこまでも続く日常が待っていた。そして結婚した二人は、よく知られているような過酷な生活を送ることになる。その最大の犠牲者は彼らの子供たちだったろう。

そこからみれば、島尾のスサノオ気取りはいい気なものだったと言えばいえる。

けれども忘れるべきではない。島尾隊は、八月十三日にポンコツな魚雷艇震洋で敵艦に体当たりする出撃命令を受ける。そのうえに、発進の号令のない待機状態のまま、八月十五日を迎えたのだ。

このことは現在のわたしたちにはとても想像しにくい。だが、死ぬことをうべなった島で「死の出撃」を待ったまま、ふいに中止になったのである。臨死体験というのでもない。死の直前まで強いられて歩んだ人が、こんどは生の方へと歩みを進めなくてはならなかったのだ。それは死に向かって生きるふつうの生とは異なり、いわば逆向きに生に戻らなければならない困難を伴うのではないだろうか。まるで死後のような生を、生きた人として歩かなければならないとでもいうような。

「自分には不幸が訪れてこないから、とても小説など書ける環境にはない」（「琉球弧から」）と思っていた島尾は、特攻隊という「奇妙なそういう場に置かれ、そして生きて帰って来た」体験は「小説に書ける」と、そう思う。しかし、この「不幸」は島尾が思う以上に「不幸」なのではないだろうか。そうだとしたら、この「逆向きの生」の持つ「不幸」を島尾がもう少し自覚していれば、家族を巻き込んだ、近代作家の倒錯的な「不幸」探しを避けることもできたのではないかという思いが過ぎる。生は思う通り選べるようにはできていないにしても、そこにひとつの可能性を見ておきたい気がする。

ただ、自覚するかどうかはともかく、この「不幸」は島尾の心に食い込んでいた。島尾の「総合的な報告」が挫折するのは、閉じた「竜宮」に突き当たったことに起因しているが、そこでの停滞と沈潜には、島尾が抱えた生の困難が鈍く脈打っていたのではないだろうか。

6．日常の発想さえちがう

島尾敏雄の琉球弧はどこまでたどり着いていたのか。「総合的な報告」に挫折した島尾に代わって、わたしたちはそれを探ってみよう。

島尾は「ただ通りすがりにまなざしをかわし合っただけの人々でさえ、どうしてみんなあのように人なつこく、あるやさしさをたたえることができたのか」（「沖縄・先島の旅」）というところに「南島理解の鍵」（同前）を見出す人だった。そこには本土の人の「表情に乏しい硬さ」（「多くの可能性を秘めた島々」）、「こわばりついた仮面」（「名瀬だより1名瀬の町、その最初の印象と町のすがたのあらまし」）がない。と、ここまでは今でも本土の人が無意識に惹かれることと同じだと言えるかもしれない。

しかし、それを「武士」が育たなかったことと関連づけたのは島尾の着眼だった。その視線は女性にも向けられて、彼は本土風の「しな」を見ることができないことに気づいている。「琉球弧では和服を狩猟民が着物をまとうように闊達に着ている」（「私の中の琉球弧」）という指摘にいたっては、これは島人でも言われなければ分からない洞察だった。

島尾の気づきは多岐に渡っている。墓には「本土のそれのようなじめじめした暗さがあまり感じられない」（「奄美の墓のかたち」）。「五代ほど前の先祖たちでさえなお昨日の人のような具体性を備えているかのよう」（「名瀬だより2その気候」）に語られる。生者と変わらないのだ。また、薩摩藩時代に「隷属的な身分」である「ヤンチュ」が生み出されたとしても、「本土におけるような差別的ないわゆる「部落」を見つけることはできない」（「名瀬だより7災厄―台風とハブと癩と」）

ことにも気づいていた。

島尾は昭和のはじめまで、「らい者だけが集団をなし、部落から遠くはなれ村人が誰もこないような一般にヒジャといわれる海辺の場所で、ユナギの下にあばらやをつくり、一種の共同生活をしていた事実がある」（同前）と指摘している。その暗さを最も象徴しているのは島尾が注で紹介している挿話だ。

「肌の美しい女」がいた。女は大和人の行商人と一緒になり、四人の男の子を生む。しかし自分が癩になったのを知って、集落から離れたヒジャに移り親子六人の孤立した生活を送る。そのうえ、大和人の夫はヒジャの掘立小屋で死んでしまう。女は、小屋の周囲で芋と野菜をつくる他、ひとりで物乞いをして子供たちを育て、上の二人をやっと就職させるところまでこぎつけた。けれどある夜、女は末の子の首に縄をつけて殺してしまう。三男が逃げた先の親戚の知らせで女は駐在に呼ばれ、「やぶれ衣のまま庭先にじかに坐って調書をとられた」。泣く泣く調書に答え、いったん帰宅を許された夜、女は「小屋の横のユナギに首をくくって死んだ」。

悲惨で痛ましい出来事と言うしかない。ヒジャは海辺でも砂浜ではなく、岩場の多いところに付けられた地名であり、ユナギ（オオハマボウ）の葉は島ではトイレットペーパーだったのだから、女が首をくくったのは厠の横だったことになる。そういう絵を加えれば悲惨さはさらに増すだろう。

それでも、この挿話がそれだけに収まらないのは、琉球弧の神話的な思考ではユナギは世のはじめからあった聖なる植物であり、海辺も人がそこから生まれると考えられた聖なる場だからである。ヒジャのユナギの下から人間が出てきたという創生神話があっても不思議ではないのだ。この挿話はそういう神話的な装いを帯びるところがある。これは民話や伝承ではなく、郷土研究会を立ち上げ運営しながら、寄稿することもなく世話役に徹した島尾が記録した数少ないエピソードなのだが、島尾は知らず知らずのうちに彼がつかみたいと思っていることに近づいていた。

話しを戻そう。

本土と琉球弧の差異を的確に指示した島尾だが、ひるがえって琉球弧を均質に見ていたのではなかった。「おおかまにいって南に行くに従って琉球度（仮にそのようなものを想定して）が濃くなると考えていいが」「むしろ奄美にそれの濃い部分があるのも確かめることができた」（「奄美・沖縄・本土」）と、はじめての沖縄の旅のすぐ後には島々の差異にも気づいている。

わたしは奄美には「風土や人々の風貌と気質」以外に、人間の作った文物の手がかりがないことも、島尾の「総合的な報告」を挫折に追い込んだ一因と見なしたが、島尾が奄美に何も見出せなかったわけではなかった。

島尾は奄美大島の島人の「芸術的な表現の造型や記録に対するすさまじいほどの」恬淡（てんたん）さに驚いている。しかしそれを欠如として見るだけではなく、「奄美のこころでありからだ」（「大島のふしぎ」）として「しまうた」を見出している。ただ、あれだけの「しまうた」がありながら「文学的表現が成立しないのは不思議」（「文学果つるところ」）というように、残念がってもいる。ここで島尾は、芸術的な表現や記録の欠如に嘆くだけではなく、しまうたや「大島紬の製作工程」（「大島のふしぎ」）への着眼の向こうに、文字を持たない思考を「有」あるいは「過剰」として見出せばよかったのだ。

ただし、島尾はそこにも気づかないわけでなかった。

まだ「琉球弧」という概念を編み出す前に、彼は「アマミの生活の基本的なさびしさは一個の廃墟（中略）を持たないことのような気がする」、と直感する。ここでいう「廃墟」とは、人間が作った文物のことであり、島尾の言い方ではそれは「人間くさい造形物」（「奄美―日本の南島」）とも言えた。

> （前略）アマミの島々を構成する地質が微小動物の殻や珊瑚虫の骨格の集合であり、島ぐるみ巨大な構造物の廃墟だとすれば、アマミは一個の廃墟ももたないと断言したことは取り消さなければなるまい。むしろ巨大な廃墟の中で、現になお現実の生活を展開しているアマミの人々の生活というものは、その言い知れぬ魅力をそのへんの事情に根ざしているのかもしれない。（「悲しき南島地帯」）

何もないわけではないという点については、その後の考古学的成果を知らないという時代的な制約はある。また、こういう島尾が、老女の手にはまだ見ることができただろう刺青に目を留めなかったのは不思議に思える。しかしここで島人の生活が巨大なサンゴの上に営まれていることに着目したところは、明らかに「琉球弧の姿を明らかにする」ことへ手をかけていた。

そののち、島尾は沖縄への旅で得たものを手がかりにしながら、「沖縄の土地がらが持つ、亜熱帯と隆起珊瑚礁地帯の性格が、人々の発想や挙措にまでしみこんでいて、そこのところは必ずしも本土の昔に重なるわけではない」（「沖縄紀行」）ところまで洞察を深めていった。そしてそれは、奄美大島を離れて三年後、一九七八年に語った「日常の発想さえ本土の人とはちがうんじゃないか」（「琉球

弧の感受」）という言葉に結実している。

7．サンゴ礁地帯

日常の発想すら違うという洞察は、「ヤポネシアの視点」からまっすぐにやってきたものだ。

> 結局のところ、被害、加害の視点でつかまえられることではなく、まず必要なことは琉球弧の本来のすがたを、ヤマトの追いかぶさりの目を排除しつつ明らかに立てることである。もちろん大根のところでは立っているのだけれど、それを表現としてはっきりあらわすとのように思う。（「琉球弧に住んで十六年」）

もともとヤポネシアの発想は、日本列島を「花ざかりの島々」と見る島尾が、太平洋に視線をずらしたときに、そこにも似た島々のあることを見出したところからやってきている。島尾は話している。「南洋の土人」という考え方が出てきがちだがそれは正確ではない。そうではなく、「南太平洋の島々の生活には、それらの島々に適した生活がおこなわれているのであって、そういう意味において、ポリネシア、インドネシア、ヤポネシア、メラネシア、ミクロネシアなどの同じような生活をする島嶼群があるのだと考えたらどうか」（「私の見た奄美」）、と。近代化に血眼になっていた島人はこう言われて、内心反発しただろう。しかし、これは島人が考えている以上の深度から島を掬いあげる言葉だった。

この視線ずらしが左を向いていたのを右にしてみたという思いつきに留まらないのは、「日本文化の素性を考える時に、あまりに大陸のことを意識しすぎている」（同前）内省を伴うからだ。その証拠に、わたしたちは今でも島尾の指摘にはっとさせられるのではないだろうか。

興味深いことに島尾は、「ヤポネシア」という概念を初めて公表した直後に、奄美大島について、「実は大陸からうつしかぶせられたうろこの最も少ない場所ではなかろうかという考えがはっきりしてきたときに、私をしばりつけてはなさぬ意思を、この島の中に感じた」（「ふるさとを語る」）と書いている。ただ、視線をずらしてみただけではない。そこには、大陸の影響が薄いのではないかという考えが伴っていた。

これは、中国の影響が造形物にも見られる沖縄ではないから言えたのではないかと思われるかもしれない。しかし、島尾は戦中の加計呂麻島で、古老が「中国との合併」を「親もとにもどるような具合に情愛をこめて」（「名瀬だより10民間信仰」）話すのを聞いている。中国との関わりがあったのを知らないわけではない。けれどもおそらく島尾は、「仏教も儒教もこの島を覆うことはできなかった」（「名瀬だより1名瀬の町、その最初の印象と町のすがたのあらまし」）という、より古層へと目を向けていたのだ。

太平洋の島々の延長に日本列島を見出したヤポネシアの発想は、大陸からの影響が少ないと考えられた琉球弧の存在に促されている。しかしここまでくると、このことの他にももうひとつ、ヤポネシアの発想を促したものがあることが見えてくる。

それは、琉球弧が「珊瑚礁地帯」（同前）であることだ。

つまり、島尾がヤポネシアを発想したのは、日本列島も太平洋の島々として見ることができるという地理的な位置のことばかりではなかったというとき、大陸の影響度が低いということの他に、琉球弧がサンゴ礁地帯であることが、もうひとつの媒介になって、日本列島を太平洋の島々に連ねてみる視点は獲得されたのだ。この、「本土をはみ出す」（「ふるさとを語る」）琉球弧の要素を梃に、島尾は琉球弧の北に延びる島々を含めて、日本列島を太平洋の島々につなげているのである。

島尾はここで、「珊瑚礁地帯」であることより、大陸からの影響が少なかったことを、島が「私をしばりつけてはなさぬ意思」として力点を置いているが、島尾敏雄が解き明かした琉球弧を追うには、「珊瑚礁地帯」として見ていたことの方へ目を向けてみなければならない。

振り返ってみれば、旅人が入り込もうとすると閉じてしまう「部落」のことを、島尾は「一個の珊瑚石灰岩」にたとえていた。また、奄美大島には「廃墟」が何もないと嘆くのを思い留まるように、地表を覆うサンゴ岩を「巨大な廃墟」として見てもいた。島尾の琉球弧には、いつもこのサンゴ礁の島という視線が伏流していたのだ。

島尾は「琉球弧」と「ヤポネシア」の概念を打ち出す前に、すでにこう書いていた。

> 奄美大島に移り住んで四年ほどが経ったとき、島尾はすでに捉えるべきものを正確に見据えていたのだ。実はこれを奄美大島で洞察するのは難しいはずだった。なぜなら、琉球弧は、北へいくほどサンゴ礁の島らしい景観は希薄になるからだ。しかし、彼は奄美大島を例外としては見てない。
>
> （前略）私の住んでいる島がたとえ本土に似たけわしい山々が重なりあっていようと、私の胸中に拡がり納まっている島のイメージは、快いたるみでふくらんだ低い丘の外には目をさえぎるもののない、波がそこのところで白く裏返る裾礁を持った珊瑚礁の島だ。（「島の中と外」）

島尾の目に琉球弧はサンゴ礁の島々として映った。そのときの島は、「せまい小さな孤島ではなくて、なにかいいあらわすことのできない広さとして」（「与論島のモチーフ」）捉えられることになった。月夜の与論島で、島尾は「浜辺の砂丘と海原との区別を失い、どこまでも目のさえぎるもののない、大地のつらなりのなかにいるような錯覚からぬけだせなかった」（「季節通信」）。サンゴ礁を媒介にして陸地としての島の境界は溶けるのだ。

実際、島の境界はサンゴ礁を区切りにして表すのがいい。そうしてみれば、たとえば宮古群島は、宮古島、池間島、伊良部島、来間島、そして広くみれば大神島までがひとかたまりの島として見えてくるだろう。八重山にしても、石垣島と西表島という大きな島のあいだに小さな島があるのではなく、石垣と西表を両極にしたひとかたまりの島として浮かび上がってくる。島の世界はそう捉えると、よく見えてくることがあるのだ。

しかし、沖縄や先島を旅した後には、与論島で捉えた「広さ」はもっと拡張されることになった。

> 島のかたちの小ささは押さえたつもりでいても、感覚的には海と空との境界の不分明な広がりを沖縄は持っていて、ひとつの限られた場所に追いつめることのできない広い世界につながっているところがある。（「琉球弧の吸引的魅力」）

サンゴ礁の島とは、サンゴ礁を通じて海と空ともつながり、溶けあった世界なのだ。

日常の発想さえちがうと言うとき、その基盤にサンゴ礁がある。わたしはここで島尾の言葉を引き取る。するとそれは語り出す。幻想の足場はサンゴ礁にある。島人よ、そこに立て。そこから立ち上るものによって言葉を生み出し、語りを編み直せ、と。

8．サンゴ礁の子

奄美大島を離れ、本土の冬の風に堪えた島尾が、「越冬」中の那覇で魅入られたのは、「「女踊り」の身のこなしと、座喜味城址のたたずまい」（「那覇からの便り」）だった。

島尾は、親しんだ「沖縄芝居」のなかで「琉球舞踊」に惹かれ、そのなかでも「女踊り」にひときわ強い印象を受けるのだが、文章に尽くすところまでは至らなかったようだった。ただ、「単純化された様式の美しさには、沖縄の人々の心の一面を表し得たあやしい到達」（同前）を感じずにいられなかったし、「同じものが演じられ方によっていろいろのかたちに見えてきて厭きない」のだった。わたしたちは、島尾がここで感じていたことを正確に写し取ることはできないが、たとえばそれは、蝶が蛹から羽化するところを何度見ても飽きないのに似ているのかもしれない。

奄美大島では「芸術的な表現の造型や記録に対するすさまじいほどの」さに驚き、文学的な表現がないことを嘆いてもいた島尾だった。しかここでは「文学をなお「うたい」「おどる」はたらきの魅惑の腕の中から解き放そうとはしないふしぎの力をまだ失うことはないように思える」（「那覇からの便り」）と、少なくとも、「芸能」こそが琉球弧の表現であると納得するに至ったのは確かだった。

島尾は「女踊り」に比べて「座喜味城址」については饒舌だ。「珊瑚石灰岩」の（アーチ型の門）を入ると「不思議な空間」が待っている。

> そこに足を踏み入れた者に訪れる永遠の感覚のようなものの、時の流れがふと立ち消えてしまったような体験は、或いは南島の時空の根のようなものの表現なのかもしれない。そこでは広ささえ確かさを失い、わずかに今くぐりはいったばかりの拱門と次なる上の広場に抜け出るための拱門が対応を示しつつ、その外側に世間の時が流れているという思いに襲われることから免れない。その空間のぐるりを取り巻く城壁のかたちのおおらかなすがた。均整のとれた直線とか左右対称などというせせこましさを飛翔して、童画さながらに奔放に伸び、曲りくねって一つの空間を囲繞している自由さは、この世のものと思えないほどだ。（「那覇日記」）

わたしは思わず、ここに描かれているものについて口をはさみたくなるが、その前に、島尾はもう少し「座喜味城址」について書いている。城址の頂の「地勢に逆らわずに伸びている」格好が、「蛇の気ままな蛇行のすがた」のようでもあり、かと思うと「時にユーモラスな破調をも示す余裕」もある。彼はそこに「言うに言えぬ自由で快い韻律」を感じる。しかも、島尾それを「女踊り」の「接近と断念という主題の濃密な繰り返し」（「那覇からの便り」）と「根は同じ」だと見なしている。

「女踊り」ばかりではない。「沖縄芝居」にも「歌謡」にも「沖縄の人々の発想や挙措」にも、「根が一つ」と感じさせるものがある。「攻防の構えを欠落させた部類の城」（「那覇からの便り」）である座喜味城と、沖縄の芸能の「生真面目な追求の中に、いきなり破調を突出させる」型には「同質の感動」があると、島尾は言う。

島尾はこの「沖縄の韻律」について、「とても解き明かす力は無いが」と断りつつ、「予感」として「沖縄がいわば「小国寡民」の経験を深くかさねてきたからではないだろうか」（「那覇に仮寓して」）と書いている。島尾は、ここで王朝の記憶に引きずられているところはあるが、「小国寡民」の言葉遣いに躓かなければ、核心を捉えているのではないだろうか。

島尾が芸能にも城址にも感じた韻律を、「根が一つ」のものとして捉えるには、その根底にまで降りてゆかなければならない。そうして思い当たるのは、曲線と破調の繰り返しというリズムには、「世替わり」によっても絶えず、時間が一方向に進むことにあらがい反復させようとする琉球弧の野生の思考が顔を出しているのではないかということだ。

たとえば、米軍統治から日本へ復帰したことを、琉球弧では「アメリカ世」から「大和世」へという言い方をする。これが「世替わり」だ。それは転換時には違いないが、「アマン世」、「クバの葉世」などと呼ばれる狩猟採集の時代までさかのぼれば、「世替わり」は、神話を更新せざるをえなくなるほど世界の構成が変わってしまったときを指していた。それはまさに、島尾が言うように「破調」と呼ぶべき事態だ。

また、これを時間に対する捉え方からみれば、今日のように明日もあるという繰り返しの感じ方が強かったのが、一方向に進むという感覚が力を増していくのが「世替わり」だった。そして現在では、それがふつうの時間感覚になっている。

ところが、それにもかかわらず、時間を繰り返しであり反復であるように捉えようとする志向性を、祭儀のなかに残してきたのが琉球弧だった（喜山荘一『珊瑚礁の思考』）。

反復する時間のことを島尾は、「座喜味城址」のこととして、「永遠の感覚」、「時の流れがふと立ち消えてしまったような体験」と書いていた。そして、その空間の醸す空気を、「この世のものとは思えないほどだ」と言い表していた。これは島尾が、永遠の現在とも言うべき反復する時間性を建築のなかに見出していたことを意味している。

島尾は「座喜味城址」に感じるものを、那覇のコンクリートの家にも、那覇の町にも感じた。そして那覇の「ラビリンス」については、その成り立ちを推し測っている。

> 即ち平らな土地がはじめから展開していたのではなく、海水に囲まれた幾つかの島や岩礁が、その固有のかたちを残したまま継ぎはぎされて、今の市街地をかたちづくったと思えるからである。（「安里川遡行」）

島尾は解き明かさないまでも、いや解き明かしていることに気づいていないだけのところまで歩みを進めていた。島尾は、韻律に「世替わり」という破調と、反復する時間を失わない身体性を感じ、そして空間にはサンゴ礁を見ていたのだ。

ところでわたしが思わず口をはさみたくなったのは、島尾の「座喜味城址」の記述が、まるで竜宮城を描いているように見えることだった。こうして島尾の感受を追えば、それはその通りだと言えるのではないだろうか。琉球弧はサンゴ礁のもとで野生の思考を育んできた。島尾は、そうは語らない芸能や造形物のなかに、いわばサンゴ礁の思考を感じとっていたのだ。

島尾はなぜ、そうすることができたのだろう。

それはやはり島尾が野生の心を豊かに持っていたからではないだろうか。奄美大島にいた頃、二十年あまり前にマニラで食べたパパイヤが忘れられないと話すと、妻のミホはいかにもミホらしく、それまで植えていた野菜を根こそぎにして庭をパパイヤでいっぱいにしてしまう。それで毎日パパイヤにありつくことができるようになるのだが、島尾はそこでこんなことを書くのだ。

> それにしても、私はパパイヤを見るたびに、たとえば、葉が茂って落ちてもそこに妻の手足を感じ、実が充実しても未成熟にとどまってもそこに妻

> 妻の姿を見、うまいうまいと食べるときには、なんだか妻のからだの一部を食べているような気持ちになってくるのは、これは一体どういうことだろうか。（「庭植えのパパイヤ」）

ここでの島尾の心は、もうほとんどミホという母に育てられる乳幼児に退行しているが、この感じ方は、ヤムイモを主食とする太平洋の島人が、それを「祖先の肉」と呼ぶのと同じ心の位相にあると言っていい。島尾はここで、ミホでありパパイヤでもある「祖先」の子として、神話を立ち上げかけているのである。

しかも島尾の野生の心にはもっと奥行きがあった。

島尾は島人の陽に焼けた黒い顔に、どういうわけか、「あの潮と陽にさらされて骨のようになった白いウル（樹枝状珊瑚塊のかけら）のような清潔な印象」を持ってしまう人だった（「名瀬だより9周辺の村落」）。そればかりではない。彼は、「白くさらされた珊瑚虫骨片の堆積を白昼の砂浜で目にするたびに、私はどうしても人間の骨を連想しないではおれない」（「奄美の墓のかたち」）のだ。島人にはサンゴを感じ、サンゴには骨を感じる。そして骨を連想してしまうのに、「その中に融和したいふしぎななつかしい感情の起きてくるのが防げない」（同前）。骨を感じるそのサンゴに溶け入ろうとしているのである。

与論島で洗骨後の骨を納める瓶を見たときのことだった。

> （前略）首のくびれたところまで砂中にうずめられた骨瓶が、強い日のひかりにはねかえり、うそのように静かに白くさらされていた。瓶はふたでおおわれていたが、ふと私自身が白骨になって、瓶の外に出、南の太陽に髄のなかまであたためられているのかもしれないような気分になっていた。（「奄美の墓のかたち」）

洗骨の骨の瓶を通して、自分が骨になってしまう気分になる島尾が、浜辺のサンゴを見て、「私はサンゴ」と言うところまでは、そう隔たりはない。こう感じる島尾が、作家の感性を離れて、これを思想として取り出すことができたら、そこにサンゴ礁を基盤にした琉球弧の野生の思考の世界が広がっているはずだった。

島に当てられ疎外されたとき、島尾はいじましくも、「しかしたとえ異和を以て迎えられても、島の珊瑚礁を抱きしめてじっとしていたい思いです」（「回帰の想念・ヤポネシア」）と書いた。

この幻想の仕草は、殻のなかに息を吹きかけるのすら遠慮して、身体で殻を温めてヤドカリが顔を出すのを待つみたいに、サンゴ礁を抱いて島人が心を開くのを待っているように見える。あるいは、島尾自身がサンゴ礁に化そうとしているようにも見える。

島尾敏雄は琉球弧にとってまれびとにちがいないが、その心は、渚に生まれたサンゴ礁の子というのがふさわしかった。

二〇一七年一月

▼喜山荘一氏のプロフィール／きやま・そういち　奄美群島・与論島生まれ。マーケター。企業の商品開発や販売促進を支援。著書に、『珊瑚礁の思考』『奄美自立論』『聞く技術』『10年商品をつくるBMR』他がある。

▼この論考は、二〇一七年一〇月二一日（土）に開かれる「神戸から 島尾敏雄を問う　文学・思想 そして奄美の位相から　リレートーク　at 神戸文学館」に合わせて執筆された論考です。

「奄美とは何か再考を」

―神戸で島尾敏雄問う

（南海日日新聞 2017.10.31）

今年、生誕１００年を迎えた作家・島尾敏雄に関するリレートークイベントが10月21日、神戸市灘区の神戸文学館であった。「神戸から島尾敏雄を問う　文学・思想そして奄美の視点から」をテーマに島尾作品、ヤポネシア論について意見交換。「顕彰から検証へ」と問題提起した。

語る人は3人。イベントを企画、担当した大橋愛由等さん（詩人、図書出版まろうど社代表）は冒頭、「島尾はさまざまな場所にかかわった表現者だが、神戸と奄美は島尾にとって枢要な場所。島尾の遺した仕事を顕彰ではなく、あらためて検証するきっかけにしていきたい」とあいさつした。

小説家の高木敏克さんは「島尾独特の夢のような小説世界は神戸的な世界だ。その神戸的な世界というのは土着風景ではなく、幻想的風景であり、あえて神戸の土着とは何かと聞かれれば、それは虚構だと言いたい。神戸とは虚構の町なのだから。吉本隆明は島尾作品を『異和』という概念で解読したが、神戸時代に書かれた『石像歩きだす』や、晩年の『夢屑』を読んでいると島尾文学の特質は「行き違い」ではないかと思う」と語った。

与論島出身でマーケターの喜山荘一氏は「もともと奄美群島には『奄美』という呼称はなく、住民にも自覚されていなかった。今も群島を南下していくと奄美という言葉は群島を総称する言葉として使われなくなる。島尾が『琉球弧』という呼称で奄美を包み込み、さらにはヤポネシアを提起することで新たに奄美を位置付けた意義は大きい。島尾はコンセプター（コンセプトを提示する人）といえる」との見解を示した。

会場からは前利潔さん（知名町役場）が発言。「島尾のヤポネシア論の根底のモチーフには、日本の中に『奄美』を正当に位置付けることによって、『奄美』の人々に励ましを送ろう、という思いがあった。いま『奄美』という言葉が氾濫しているが、島尾の言説を手掛かりに、『奄美』とは何かを再考する必要がある」と指摘した。

最近、奄美内外で話題になっているミホ夫人の評伝（梯久美子著『狂うひと―「死の棘」の妻・島尾ミホ』）についても意見を交わした。「作家の意図に反してフィクションをノンフィクションとして読もうとする傾向が出てきたのではないか」と厳しい評価があった。

大橋さんは「今回のトークは、神戸と奄美からの島尾敏雄への語り返しの一歩となったのではないか。島尾夫婦を直接知らない世代の新たな島尾語りが始まった印象を持った」と締めくくった。

10.21 リレートークのためのフライヤー

詩と評論
月刊「Mélange」特別号
神 戸

2017年11月21日　特別号
発行所／月刊「Mélange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集・発行人／大橋愛由等（「Mélange」同人）
maroad66454@gmail.com
定価 600 円(税別)